紹介

日本神話研究

肥後和男著

我國古代の傳承はそれが始めて記紀に載錄せられた時以來、時代の移り變ると共に常に新しい解釋を加へられ來つたが、そのことはそれが單なる過ぎし世の昔語ではなくして常に時代の規範として、古事記の序文に所謂邦家の經緯、王化の鴻基たる意味を有してゐたからであつた。然るに明治以來かくの如き古代傳承の本質は一般に神話たるにあるとせられた。これまた一の解釋たるを失はないが、然も人々はそれを神話と名づけることによつて專ら之を他民族のそれと比較類別してそれらの間に流布傳播等の關係を明らかにするを以て主たる關心事となし、それが永き歷史を通して民族生活の上に有した意味とその變遷に留意することを忘れ勝であつた。我々は我國の古傳を以て神話なりとすることに何等異議あるわけではないが、然もかくの如き所謂比較神話學的研究に對しては、嘗て津田左右吉博士がその「神代史の研究」に於て主張せられたやうに、まづ以て記紀の所傳そのものが本來如何なる性質のものであるか、換言すればそれは如何なる意味に於て神話であるか、に就て十分なる吟味のなされねばならぬことを思ふのであつて、津田博士自らは綿密なる本文批評の結果、その神話としての性格を遂に否認せられたこともその際必ず一應顧慮されねばならぬであらう。

然らば日本神話なるものは抑も如何なる意味に於て考へられるであらうか、また今日神代史として傳へられる種々の物語はそれを語り傳へた古代社會に於て本來如何なる意味を有したものであらうか——肥後和男氏の近著「日本神話研究」は、これら日本神話の有つ最も根本的なる問題に對し最も深き洞察と明解なる判斷とを以て新しく獨自の解答を試みたものとしてこの方面に於ける近來出色の好著であると思ふ。

この書は氏が昭和五年頃より最近年に至るまでの間、諸種の雜誌に一度公表せられた日本神話に關する論考の輯錄として、別段體系的な研究ではないが、その取扱ふところは「日本神話の觀念」「日本神話に於ける國家起源の問題」等最も一般的な問題より、素盞嗚尊、大物主神、健御名方神等の神話を始め、賀茂傳說、稻荷傳說等記紀以外の書によつて今日に傳はる重要なる神話の多くにも亙り、然もそこに一貫して一つ明確なる立場——歷史的民俗的立場の固持されてあるを見るのである。所謂歷史的とは古代傳承そのものが歷史的生成の過程を自己自身の中に包藏することを想定し、それを分析しその過程を明らかにしようとするものであり、所謂民俗(學)的とは古代傳承の分析に當つて、現在の地方民俗を基礎に古代の民族生活を形態的に推定し、それに對應すべき傳承の形を探求せんとするもの、神話解釋の方法として特に問題となるべきは主としてこの後者にあると考へられる。蓋し神話

は決して唯一度限りの過去の事件を記念しようとするものでなくして寧ろ年々繰返へして行はるゝ祭儀の理由を説明し眼前の事實として存在する民族的國家の起源を説かうとするものであるとする一般的解釋が一應正しいとしても、古代の神話を理解するに現在の民俗を以てすることは時代の倒錯であり、若し現在の民俗が類型的にせよ古代のそれと同一であることを假定するならば、それは神話が時代によつてその意味を改めて行くとする歴史的立場と自ら矛盾する如くも考へられるからである。たゞ併しながら古代神話の基礎にあるとされる古代の民族生活なるものは所謂歴史的、文獻的方法のみを以てしては容易にその全體の把へ難いに對し、現在の民俗の考察に於ては、全體の理解がまづ我々に直接なるものとして與へられて居り、それによつて個々の行事や説話の意味を正しく判斷しうるところに、それを基礎に古代神話の意味をも類推しうべき可能性が存するのである。

氏が果して如何なる程度までこの可能性をよく現實になしえたかは、各編個々に就て一々檢討してみるの外はないが、今全體としてこの書に看取せられるものは氏の神話解釋に於ける強き合理主義であると思ふ。それは勿論かの古き Euhemerismus のそれではないが、少くともあらゆる神話に於てその意味は我々の論理によつて殘るところなく把握しうべきものであることを豫想する。例へば一つの神話を定立するものはその社會であるとする氏の基本的假説は畢竟神は人なりといふに代へて神は社會なりといふと一つであるともいへよう。あらゆる意識が遂に存在に還元しえらるべきものか否かの論議は姑く措き少くとも神話にあつては其非合理的なる要素こそ寧ろ一層重要なる意味を有つものと考へられるならばこの新しき合理主義の限界も自ら知られるであらう。(その點かの所謂比較神話學が意識を意識として唯その間に發展關係を考へようとするところ已が分野を守るものといひうる。)

紙幅の關係上論旨の内容に就いて今一々紹介することの許されないのは是非なきところであるが、本書中最も長く且最も力作とも考へられる賀茂傳説考に就ては嘗てそれが東京文理科大學紀要として始めて世に出たとき(昭和八年)、本誌に於てもその内容を紹介したことがあり、その他の諸篇また同じく氏獨自の意見に富み極めて示唆深きことを述べてこの文を畢る。(菊判四五二頁、東京河出書房發行、定價三・五〇)(柴田)

寧樂佛教史論

大屋德城著

大屋氏は既に佛教史學に關する多くの著述によつて知られてゐる人であるが、本書はそれらの過古に於ける業績を地盤として新たに寧樂佛教の本質を究明されたものである。けれ共我々は寧樂佛教史論を通讀してその組織や論述の意圖に觸れる時、氏の前著日本佛教史の研究とは又異つた意味に於て優れた價値を見出す事が出來る。第一に本書は其の題名から直ちに想像される樣な單なる寧樂佛教に關する概説書ではなく、日本佛教の展開過程に於て寧樂の佛教がどの樣にして形成され又一轉しては其れが平安朝以